

⑭ *Sarir tutung* といふのは僧位であらう。元典章吏部一、拾存備照品官雜色の中、從五品の條に「諸城所副都統」といふ官が見える、之によると、當時も都統といふ官名も有つたものと思はれるが、僧侶にして都統と稱したものゝ多かつたことは、ル・コック氏の *Chotscho* 第十六圖の壁畫の題銘を見ても分る。吐魯番附近で獨逸の遠征隊の得た回鶻文金光明經の斷簡の奥書に、その經の譯者の名を擧げて、*bis baliq-lyr singqu sali tutung* 即ち「ビシュバリックの人シンク・サリ・都統」と記してあるが (F. W. K. Müller, *Uigurica*, S. 14) *sali tutung* といふのは、*Sarir tutung* と對比して考へて見るべき名である。Müller氏は *Sali* の名から、直ちに *Bretschneider* によつて譯述された明史の安定即ち撒里畏兀兒を見るべき名である。自分も在英當時 *sarir* の名から、宋代以後一般に知られて居る黃頭回鶻を初め、*Tarikh-i-Rashidi* に見える *Sarig Uigur* や、明史の撒里畏兒に想到したのであるが、果して之が回鶻の一部としての *Sarir* か、或は單に「黃」といふ色の名で、之を都統なる僧位の上に冠したに過ぎないものか、尙更に他の資料を待ちて決定すべき問題であると考へる。

⑮ *orul* は言ふまでもなく「子供」「子息」の義であるが、此の語に *an* を加へた *orlan* といふ語は、蒙古では甚だ古い時代から、宗室の系統を引いた諸王を稱ぶに用ゐられ、これが人名の後に附けらるゝ時には、ペルシャ語で *Mirza* (オスマン語でサルタン (*Sultan*)) といふと同じやうに、*Prinz* の義に用ゐられて居ることは能く知られて居ることである。こゝでは單に *orul* の形であるが、或はこの *orlan* と同義ではなからうかと思ふ。王子、諸王などの意としてかりに王子の譯を施したのである。

*lingci* は漢語「令旨」*ling chih* の音を寫したものに相違ない。此の語からしても、また前記 *orul* を *Prinz* の意味に解釋することは妥當かと思ふ。

因に記して置くと、敦煌の莫高窟に在る元の至正八年の造象記に、其の功德主を擧げた所に、「妃子、屈朮、速來蠻西寧王、太子養阿沙、速丹沙、阿速歹」以下數十名を記して居る。この阿速歹といふのは、或はこゝにいふ *asudai* では無からうか。其の年代の關係、場所の關係、及びこゝに共に記されて居る人々の位置から考へて見て、或はさうではないかとも思はれ